

## 巻頭言

COVID-19 感染拡大下に生物学的精神医学研究について  
思うこと山末 英典  
浜松医科大学精神医学講座

2019年12月に中国湖北省武漢市に始まった新型コロナウイルス COVID-19 の流行は、世界的、全国的に拡大の一途を辿り、2020年6月8日現在、世界の累計感染者数は6,931,000人、死亡者数は400,857人、日本全国での累計感染者数は17,210人、死亡者数は916人と報じられている。この流行拡大は社会や日常生活のさまざまなレベルで大きな影響を与え、連日多くの報道がなされ、広く関心を集めている。こうした中で、COVID-19 に対してのワクチンや治療薬の開発、感染流行の疫学的知見、あるいは気温や湿度や日光に対する生存力といったこのウイルスの性質についての医学的研究も、一般社会で広く関心を集めている。

医学研究は、本来は必要性の高いものから行われ、必要性の乏しい研究に時間やコストを費やすことは、たとえその研究が無侵襲であっても倫理的に問題であるとも考えられている。COVID-19 のような感染症の研究については、ワクチン開発や治療薬開発、感染拡大予防対策の策定に必須のウイルスの性質を1日も早く解明することが、当然のように優先される。早くワクチンが開発されなければ世界中で毎日数千人のペースで死者が増加してしまう状況の中では、ワクチン開発を迅速に進めることの必要性は誰がみても明らかである。実際、ワクチン開発などについて熱のこもった報道がされ、政治家も医学的知見についても言及した会見を行い、一般社会からも感染症専門家の発言に対して多くの関心が寄せられている。

こうした状況は、精神医学領域の研究における「必要性が高いこと (Relevant)」について考える良い機会になるのではないかと考えている。厚生労働省の患者調査によれば、2017年の精神疾患の総患者数は419万人である。この統計に発達障害は含まれておらず、一般人口の約1%とされる自閉スペクトラム症や約5%とされる注意欠如多動症も含めると、COVID-19 の累計患者数の数100倍から1000倍近い総患者数が報告されていることになる。さら

に、精神疾患や発達障害はその多くが若年齢で発症し、慢性に経過して長年にわたり日常生活や社会生活を深刻に制約することを考えると、感染症例のほとんどが数週間程度の経過で完治するとされている COVID-19 に比べて、その問題の重要さは比較にならないほど大きいとも考えられる。しかし、COVID-19 のような新規感染症の研究とはある意味対照的で、精神医学領域では研究テーマにおける重要な要素として、新規性や興味深さや倫理性に比べて必要性が軽視されがちで、当事者や家族が解決を求める問題と研究者が関心を持つ研究テーマに乖離が大きいことが散見される。

こうした状況に關与する COVID-19 と精神疾患や発達障害の差異について、僭越ながら自分なりに考察してみたい。COVID-19 の特徴である、急性の経過をとり発症後数週から早い場合には数日で死に至ること、誰もが感染する可能性があること、新たに生じた疾患であること、いつ感染するかわからないこと、などがこの状況の違いに關与していると推測される。他方、古くから続きある意味定着してしまっているともみなされがちな問題で、慢性の経過を辿り、実際にどうかは別として自分が罹患する可能性について否認されがちな精神疾患では、その研究における必要性が軽視されやすく、当事者や家族が解決を求める問題よりも研究者が関心を持ちやすい研究テーマが設定されやすいのだと考えることができる。このように考えると、精神医学の研究者に求められる姿勢としては、精神科領域における現在の医療では解決できていない問題の大きさに常に向きあい、研究者が関心を持ちやすいテーマよりも当事者や家族が解決を求める問題こそを研究テーマとして優先することが必要ではないだろうか。いわゆるアフターコロナの、合理性や機能性が進化した社会では、これまで以上に必要性の高い精神医学研究を行うことが求められるようになっていくと考えている。